

# 野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

## オキナグサ *Pulsatilla cernua* (Thunb.) Bercht. et C. Presl (=*Anemone cernua* Thunb.) (キンポウゲ科 Ranunculaceae)

連絡先：城西大学薬学部生薬学教室  
shiratak@josai.ac.jp

日に日に暖くなる春爛漫の4月，最近では，山の中でほとんど見かけなくなった植物の一つにオキナグサ（翁草）があります。日本，朝鮮半島，中国東北部に分布し，日本では本州，四国，九州の山地の日当たりのよい草原や河川の堤防などに生育しています。根出葉は2回羽状複葉で，長い柄があり，小葉はさらに深く分裂しています。茎につく葉は3枚が輪生し，葉や花茎など，全体が白い長い毛に包まれています。花の咲く頃，花茎は10cmくらいの高さですが，花後の種子がついた白い綿毛がつく頃は30～40cmになります。花期は4～5月で，暗赤紫色の花を花茎の先端に1個つけ，ややうつむいて咲きますが，次第に上向きに変化します。長さ2～2.5cmのがく片が6枚あり，花弁のように見え，たくさんある雄しべのうち最も外側のものがこん棒状に膨らんだ仮雄しべとなり蜜を分泌します。名前の由来は，白く長い綿毛のある果実の集まった様子を老人の頭にたとえたもので，ネコグサ，ネコバナともいわれ，その他，日本各地でオバシラガ，ババシラガ，カワラノオバサンなどとよばれ，かつては日本中で親しまれた植物だったようです。しかし，現在，その数は，激減し，絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (環境省レッドリスト) に指定されています。オキナグサが減少した要因としては，自然環境の変化や園芸目的の採集などがあげられます。

乾燥した根は，ハクトウオウ（白頭翁，*Pulsatillae Radix*）といい，消炎，収斂，止血，止瀉薬として，熱性下痢，腹痛，痔疾出血などの治療を目的に白頭翁湯，はくとうおうとう 白頭翁加甘草阿膠湯などの漢方処方に用いられます。成分には，全草に2-ブテノライドのprotoanemonin，その配糖体のranunculin（抽出過程で生成する2次的産物と考えられる），トリテルペンのhederagenin，pulsatillic acid，そ



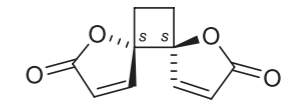
写真3 オキナグサ (若い果実)



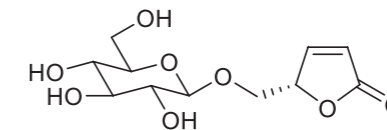
写真4 オキナグサ (瘦果)



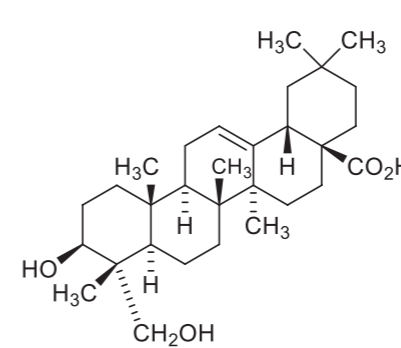
protoanemonin



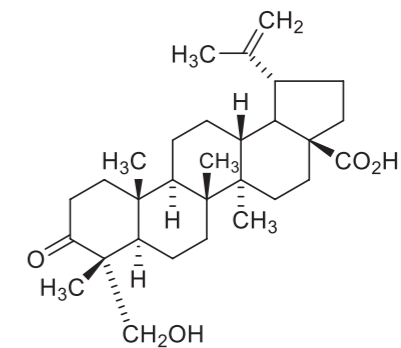
anemonin



ranunculin



hederagenin



pulsatillic acid

図1 成分の構造式



写真1 オキナグサ (芽生え)



写真2 オキナグサ (花)

これらの配糖体（サポニン）を含み、有毒植物の一つに数えられています。植物の液汁に触れればウマノアシガタ *Ranunculus japonicus*, カザグルマ *Clematis patens*, センニンソウ *Clematis terniflora* などと同様に皮膚炎を引き起こすこともあり、また、誤食すれば腹痛、嘔吐、血便のほか、痙攣や心停止（protoanemonin は心臓毒）に至る可能性もあります。protoanemonin は皮膚や粘膜に対する刺激性が強く、引赤、発泡性がありますが、日干しにより二量体の anemonin に変化し刺激性や発泡性は無くなります。



写真5 生薬：ハクトウオウ（白頭翁）

同属植物にヒロハオキナグサ *P. chinensis* があり、両者はどちらも瘦果に白い毛が生えていますが、オキナグサは花が下向きに、ヒロハオキナグは上を向いて咲きます。一般に中国では、ハクトウオウというとき、ヒロハオキナグサを指します。中国で名前の由来となった白茸は根茎の頭部を指しますが、オキナグサの根茎の頭部に毛は無く、ヒロハオキナグサには白色の絨毛が生えています。また、現在、オキナグサの仲間であるセイヨウオキナグサ *P. unlaris* の抽出エキスは前立腺肥大の医薬品原料になることが知られています。